

「教える育てる道徳教育」指導資料

# ふるさととちぎの心

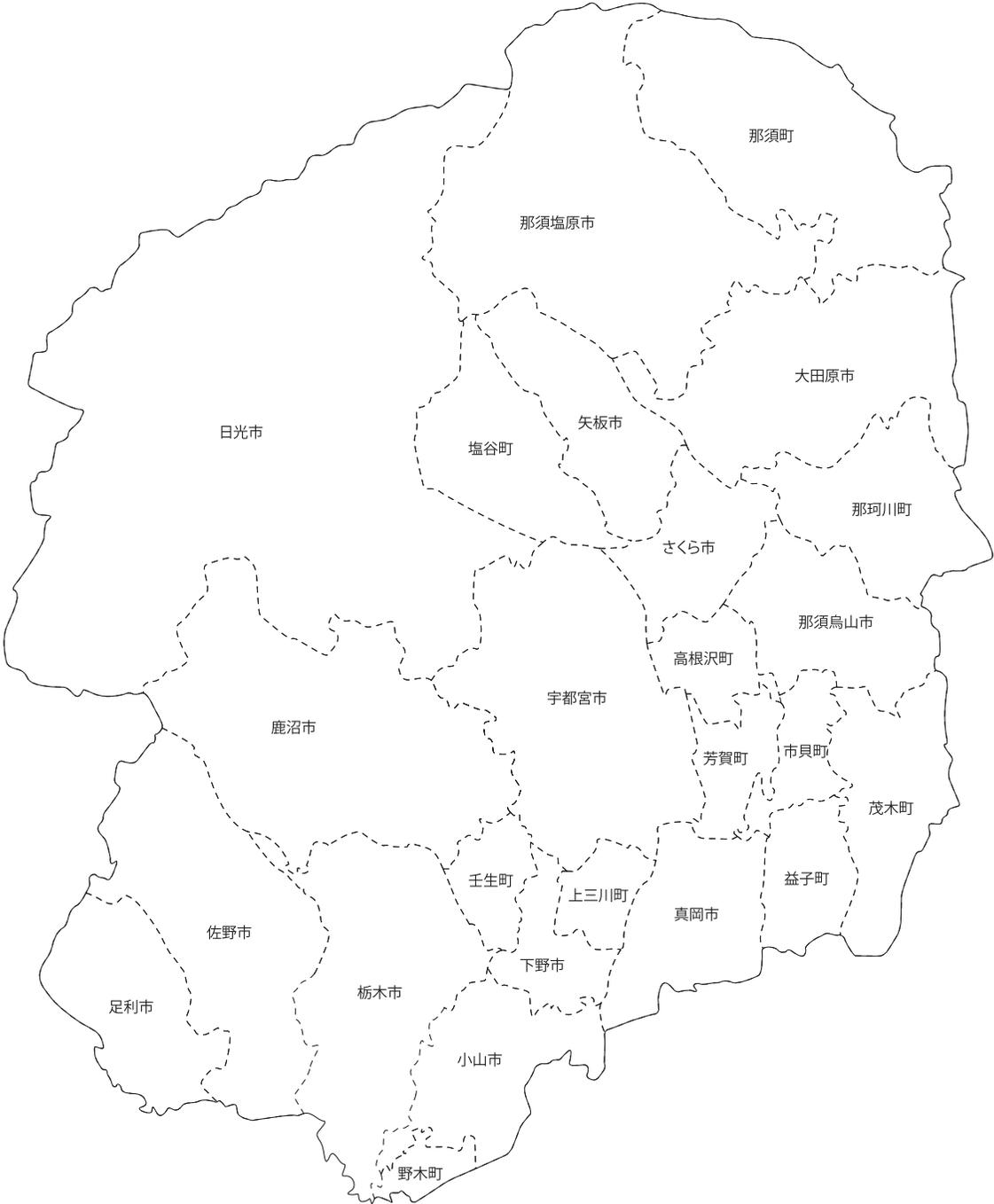
栃木県道徳教育郷土資料集

(小学校高学年編)

栃木県教育委員会

# 栃木県

平成26年4月5日現在



ふるさと とちぎの心

この言葉から、みなさんはどんな心を思いうかべますか？

この資料集しりょうしゅうには、栃木県に関わりのある「人」や「自然」や「伝統でんとうや文化」などを素材ざいにした読み物が紹介しょうかいされています。

この資料との出会いによって、みなさんはいろいろなことを感じることでしょう。

人間のもつ強さ、気高さけだか、勇氣、温かさ

ふるさとの豊ゆたかな自然や生命力

大切にされてきた伝統や文化 など。

ふるさとは、私わたしたちに大切なことを教えてくれます。そのふるさとにはこりを持ち、みなさん一人一人が、夢ゆめや目標に向かって、力強く歩んでいくことができるよう願っています。

# 目次

1	いちご一筋 <small>ひとすじ</small>	仁井田一郎 <small>にいだいちろう</small>	1
2	よみがえった法隆寺 <small>ほうりゅうじ</small> の壁画 <small>へきが</small>	— 荒井寛方 <small>あらいかんぼう</small> —	5
3	いつでもどこでも		9
4	心に灯 <small>ひ</small> をともした鉢 <small>はち</small> の木	— 鉢 <small>はち</small> の木物語 —	13
5	はが路 <small>じ</small> 100 km 徒歩の旅		17
6	ポイ捨 <small>す</small> てされたゴミ		21

	7	もう一つのワールドカップを知って	25
	8	お囃子 <small>はやし</small> 会での活動を通して	29
	9	須賀 <small>すが</small> 神社の落ち葉はき	33
	10	わたしの生きがい	37
	11	いつもふわふわ魔法 <small>まほう</small> のパン	41
	12	明 <small>あきら</small> と祭り	45
参考資料		「とちぎの子どもたちへの教え く人として、してはならないこと、すべきことく」	49

# いちご一筋 仁井田一郎

栃木県はいちごの収かく量が日本一である。その栃木県で最初にいち

ごの栽培に成功したのは、足利だといわれている。仁井田一郎さんは、

一九一二年（明治四十五年）御厨町（現在の足利市）に生まれ、栃木県のいちご作りの基そを築いた一人である。



戦争が終わった当時、栃木県の農業は、米や麦作りが中心だった。しかし、米をたくさん作りすぎない政策が取られるようになり、農家の収入は増えなかった。そこで、一郎さんは、農家の収入を増やし、豊かな町づくりを進めるために、そのころではとてもめずらしい、「いちご作り」を同じ仲間の農家の人たちに提案した。御厨町をいちごの町にしたいと考えたのだ。だが、いちごは本来、暖かい地域で育つ作物である。栃木県のように、冬の寒さが厳しい地域でのいちご作りは難しいといわれ、神奈川県よりも北の地域では例がなかった。そのため、「御厨町では、いちご作りは無理だろう。」という不安から、地域の農家からは反対する意見が多かつ

た。それでも、一郎さんの胸むねの中の熱い思いは変わらなかった。

一九五〇年（昭和二十五年）のある日、一郎さんは、いちご作りが盛さかんだった静岡しずおか県を訪ねた。いちごのなえはとても貴重きちょうなもので、外に持ち出したり貸かしたりできないものといわれ、簡単かんたんにはゆずってもらうことはできなかった。しかし、一郎さんは何度も何度もたのみこんで、やっと八本のなえを分けてもらい、リュックに入れて大切に持ち帰った。

家に帰ると、一郎さんは、何とかしてこの八本のなえを冬の寒さから守ることができないかと考え、障子しょうじに油をぬったじょうぶな紙でなえを囲んで、その中で育てようとした。当時は、今のようなビニールハウスはなかったのだ。しかし、西風が強く、紙は破やぶれ、八本のなえを一本残らず枯からしてしまった。一郎さんは、ゆずってもらうまでは帰らないつもりで、再び静岡県までなえを買いに行き、新しいなえを分けてもらった。

一郎さんは、寒さの厳しい栃木県に合った育て方を見つけるまで、植えては枯らし、枯らしては植えることを、一年、二年とくり返していった。朝から晩ばんまで何度もなえを観察しては工夫を考え試たす毎日。肥料ひりょうや夏場の高温、冬場のかんそうにも細かい注意をしながら、一つ一つのなえを大事に大事に育て、もくもくと研究を重ねていった。

そして、三年目。やっと花がさき、実を付けることができた。栃木県でのいちご、第一号で

ある。その後、五年目ごろからはようやく収かくができるようになり、出荷しゅっかされ始めた。

一郎さんは、よりよいものを作るため、いちご作りの進んだ方法を学びたいと思い、家族の反対をおし切つてどこへでも出かけて行つた。「農家を回るのは、自転車が一番。」と言いながら、足利から約百五十kmはなれた神奈川県まで、自転車で二日がかかりで行つたこともある。いちご作りの工夫のことはかり考えて、自転車のペダルを踏む足のつかれも忘れわす、十日間もその自転車で多くの農家を訪ね回つたのだ。

寒い栃木県でのいちご作りを可能かのうにした一郎さんは、いちご作りへの熱い思いをますます強くしていった。そのころ、春先に収かくされていたいちごをより早く収かくするための研究を始め、一月下旬げしゅんの収かくを実現じつげんさせた。

そして、その後もさらに早く収かくする方法はないかと工夫を重ね、「山上げ栽培」<sup>①</sup>を成功させた。こうして、収かく時期を一気に早め、高い値段ねだんでたくさんの方が売れるクリスマスケーキ用のいちご作りを可能にしたのだ。これによつて、農家の人の暮らしは豊かゆたかになり、いちご作りに反対していた人も、安心していちご作りに取り組めるようになった。

一郎さんの取り組みが新聞でしようかいされると、栃木県のいちごは「日光いちご」の名で、全国に知れわたるようになっていった。それでも、一郎さんは、毎日のように各農家を回つて



指導しどに当たった。

「みんなにやってもらうんだ。栃木県を日本一にするんだ。」

そう言っつて、だれにでも、どんなときでも喜んでいちご作りの方法を教え続けた。

一郎さんは、生がいを「いちご一筋」にささげたのだ。

そして、一郎さんがいちご作りを提案してから十八年後の一九六八年（昭和四十三年）、ついに、栃木県のいちご収かく量は日本一になった。



現在、足利市下渋垂町しもしづ たれちようの足利市農協には、「栃木県いちご発祥の地はつしょうのち」の看板かんばんがある。仁井田一郎さんが根付かせたいちご作りは、足利市から県内各地に広がり、「とちおとめ」や「スカイベリー」などの新しい品種にも引きつがれていった。

そして、栃木県は一九六八年（昭和四十三年）から今日こんにちまでずっと、いちごの収かく量日本一をほこっている。

（注）

① 夏の間、いちごのなえを標高ひょうこうの高い山地で育て、秋に山地から下ろし、「暖かい春が来た」となえにかんちがいをさせ、花をさかせるという栽培方法。

## 2 よみがえった法隆寺の壁画 — 荒井寛方 —

奈良県にある法隆寺の金堂（本堂）の壁には見事な壁画が描かれています。

この壁画は、仏教の歴史にとっても、また、わが国にとっても大変重要な物です。しかし、法隆寺は、木造の古い建物なのでいつか焼けてしまうのではないかという心配があったため、国は、一九三四年（昭和九年）、法隆寺が大修理を行う時に金堂の中の壁画を模写して保存することにしました。そして、そのために、日本中から仏教画を描くすぐれた画家たちを集めました。

一九三九年（昭和十四年）、荒井寛方は、この壁画の模写をたのまれました。かれは、この時すでに六十三才になっており、しかも、病気のために手が少し不自由でした。しかし、かれはこの仕事を引き受けることにしました。

次の年から十六人の画家たちが四班に分かれて模写を始めることに決まりました。寛方は、第四班の模写主任に選ばれました。かれは、三十八才の時にインドにわたり「アジャンタ壁画」を模写した経験をもっていたからでした。

寛方ら四人は、小さな寺で生活をともにしながら、春と秋の二回、一年のうち百五十日近くも家から離れて模写の仕事にはげむことになったのです。

仕事始めが近付いたある日、寛方は法隆寺金堂の前に立ちました。

かれの後ろ姿は、あたかも目の前の金堂に今の自分の思いを話しかけているかのようでした。寛方らは、「薬師浄土図」と呼ばれる壁画を担当し模写を開始しました。

その壁画は、はがれ落ちていている所が多いので、もとの様子がはっきり見えませんでした。まるで、もやがかかったようでした。その上、カビや汚れのため本来の美しさを完全に失っていました。

壁画の模写は、ひびが入ったりはがれ落ちたりしている部分も、また、髪の毛ほどの傷でさえも実物通りに写さなければなりません。どんな小さなことでもていねいにやりぬかねばなりません。これはとても時間のかかる作業であり、それと同時に、細かい技術やすぐれた技術が必要な作業でした。しかも、非常にせまいところでやらなければならなかったのも大変でした。

その作業は、毎日朝八時から始まり夕方五時まで行われました。金堂の中で一日中作業をしている寛方は、時がたつのも忘れて取り組みました。ところが、これだけ一生けん命やっても一日にわずか三センチメートル四方を仕上げるのがやっとでした。

この模写は、初めは三年くらいで完成する計画でしたが、当時の代表的な画家が描いた壁画の細かいところまでの美しさを写せば写すほど、予定通りには進まなかったのです。予定より

かなり遅れていました。

壁画の模写が始まって一年が過ぎたころ、思いがけないことが起こりました。画家たちの中から病気になる人が次々と出てきたのです。それは、一日中、うす暗くせまい金堂の中に閉じこもっているためでした。

また、不平を言う画家が出てきたり、仕事をやめたいと言う画家が出てきたりしました。それは、長い間家を留守にしなればなりませんし、自分の絵を描く時間が少なくなり、お金も入ってこなくなるからです。ここでの仕事は出来高払いであり、そのため、今までの収入の保障がどこにもなかったのです。かれらは、多忙な時間をやりくりして一年の約半分をこの作業に当てていたのですから、予定より長引くとなると文句が出るのはやむを得ないことでした。

寛方は、壁画をじっと見つめました。

ある新聞記者が、寛方を訪ね取材をしました。

「仕事はあと何年くらいかかりますか。」

「予定は三年だったが、この分で行くと何年かかるか分からない。」

「やり通しますか。」



「やりかけたことは、やらんといけないうしよね、君。」

「模写という仕事は大変ですね。」

「命あるものは、やがてほろびますよ。価値あるものを後世に伝えるのが私たちの務めですよ。」

寛方は、落ち着いた様子で語りました。

太平洋戦争が始まったのはそれからまもなくのことです。日ごとに戦争が激しくなって、法隆寺の近くにも爆弾が落とされるようになりました。それにも関わらず寛方は、この苦しきの中で模写の仕事を続けました。

一九四五年（昭和二十年）四月、寛方は、氏家町（現在のさくら市）から法隆寺に向かう汽車の中で病気のため倒れました。そして、そのまま亡くなってしまいました。しかし、寛方が受けもった壁画の模写は、一部だけを残してほぼ完成していたのです。

（注）

- ① 本名は寛十郎。東京に出て画家となり、二十四才の時に日本の古い絵を模写する仕事を始める。
- ② 似せて写すこと。実物どおりに写しとること。
- ③ インド中部の丘陵地帯にある石窟（ほら穴）に描かれた壁画。二千年以上前から七、八百年かかって仏像や動植物などが描かれた。
- ④ 労働時間には関係なくできあがった仕事に応じて賃金を支払うこと。また、その賃金。

### 3 いつでもどこでも

「優太くん。また明日ね。」

後ろからぼくを呼ぶ声が聞こえた。

ぼくが、家族で近くのレストランへご飯を食べに行き、席を立ったときのことだ。ふり返ってみると、それは学童クラブのバスの運転手さんだった。

ぼくの家では、父も母も仕事をしているので、五年生になった今でも学校が終わると毎日学童クラブに行く。そのときに乗るバスの運転手さんだ。毎日聞いている声なのに、顔を見るまでいったいだれなのか分からなかった。ぼくはただ、軽いえしゃくだけをして店を出してしまった。

「運転手さんは、どうしてあんなところで声をかけてくれたのだろう。」

店を出てからも、ぼくは、気になって仕方がなかった。父が運転する車の中から夕焼けの空と太平山をながめながら、学童クラブのバスの中の出来事をいろいろ思い出していた。

ぼくが運転手さんに出会ったのは、一年生の四月だ。初めてバスに乗るときに、一年生は自己しようかいをすることになった。バスのドアの前に立っていた運転手さんは、笑顔で見つめてくれていた。順番を待っているとき、ぼくの心臓はとでもどきどきしていた。勇気を出して名前を言ったが、ちよつと声が小さくなってしまった。

バスから降りるとき、みんなは運転手さんにあいさつをしていく。いよいよぼくの番がきた。ぼくは、さっきの自己しようかいより大きな声であいさつしようと思っていた。

「ありがとうございます。」  
やっぱり小さな声になってしまった。

そのとき、

「どういたしました。また明日ね。」

と、運転手さんは優しく言葉を返してくれたのだ。

ぼくは、なんだかほつとした。さっきまでのどきどきが、ぱつとなくなったことを今でもはっきり覚えている。

それ以来、いつもぼくは、精いっぱい元気な声であいさつをしようと思っていた。だから、みんなに負けなくらいの大きな声で、

「ありがとうございました。」

と、あいさつをしてきた。すると、

「どういたしまして。また明日ね。」

運転手さんは、ぼくの顔を見ていつも言葉を返してくれた。

運転手さんのそんなやりとりがあるからこそ、次の日も、また次の日も、学童クラブのバスに乗るのが楽しみだった。

「また明日ね。」

運転手さんのさりげない言葉は、時にはぼくをはげまし、時にはなぐさめ、時には喜びをあたえてくれた。たった一言にも、いろいろな思いがこめられていた。それは今日のレストランでも同じだった。いつでもどこでも優しく声をかけてくれる運転手さん……。

それなのにぼくは……。



ぼくは今もバスに乗り、学童クラブに通い続けている。バスの窓からは、太平山がよく見え、そのふもとに学童クラブがある。五年生になったぼくにとって、すっかり見慣れた景色になっている。最近のぼくは、どんなあいさつをしていたらどうか……。

気が付くと、雲一つない空に月が出ていた。運転手さんの顔が重なって見える。

「よし、明日からは……。」

翌日、ぼくはいつもの場所でバスを待っていた。遠くからバスがやってくるのが見えた。



## 4 心に灯をともした鉢の木 — 鉢の木物語 —

習字が終わって家に帰る途中、ぼくは見知らぬおじさんに願成寺までの道を聞かれた。願成寺といえ、佐野源左右衛門常世の墓があるお寺だ。おじさんは「葛生（現在の佐野市）にか伝わっていない佐野源左右衛門の話」を聞きに来たのだという。ぼくもすごく興味がわいて、いつしよに話を聞かせてもらうことにした。おしよさんの話は、次のとおりである。

佐野源左右衛門常世の父は、北条氏に仕え、鎌倉幕府の役人として、おくら番を①しています。ある年の夏、くらの中の大事な品物の虫干しをしたところ、頼朝公が大事に②していたという名刀がなくなっていました。手をつくして探しましたが、とうとう見つからず、そのため、常世の父は、役をやめさせられ、浪人となってしまいました。その後、この願成寺のおしよをたよって、はるばる葛生の地へやってきました。

やがて、男の赤ちゃんが生まれました。そして、赤ちゃんはすくすくと育ち、武士として立派に成人し、佐野源左右衛門常世と名前を改めました。

そしてこれからが、世に知られている「鉢の木物語」になります。

一二五三年（建長五年）のはじめ、厳しい寒さに明けた冬の朝、降り出した雪は、まもなく激しいふぶきとなって、一日中降り続きました。人っ子一人通らない大雪の夕暮れ近くに、一夜の宿を、と常世の家ののき下に立った旅僧がありました。雪と寒さで旅僧は今にもたおれそうです。

常世夫婦は親切にむかえて、いろりばたに招きました。激しいふぶきの中、よほど歩いたと見えて、旅僧の体は、冷えきって固くなり、いろりの前に来てもいつこうにふるえが止まりません。常世はありったけのたきぎをいろりにくべ、温かい粥をふるまいました。そのおかげで、旅僧の氷のように冷たくなった手足や体も、少しずつ少しずつ温まってくるようでした。

ふるえが少しおさまった旅僧が、辺りを見回すと、雨風をしのぐのがやつとのようなそまつな家です。しかし、きれいに片付き、部屋のすみには、やりがかけてあり、とこの間には、古びたものですが、よろい、かぶとがきちんと置かれています。旅僧は「これはただの農家ではあるまい。名のある武士が何か訳あつての仮住まいであろう。」と思いました。そこで旅僧は、名前と訳をたずねましたが、常世は、口をつぐみました。

その時、たきぎがなくなり、妻の白妙が困った顔をしてやってきました。いつもなら十分間

に合うだけのたきぎがあったのですが、旅僧があまりにもふるえていたため、いつもの二倍も燃やしてしまったのです。

常世は、窓の外に目をやりました。しかし、外はふぶき、たきぎになるようなものは、何一つありません。常世は、しばらく台所の方を見つめて考えこんでいました。そして、急に立ち上がると、台所に行き、とりこんでいた鉢植えを持ってきました。常世が日頃から丹精をこめて育てたもので、見れば、梅、松、桜のいずれも立派なほんさいです。それをおしげもなく折っては、くべ始めたのです。まだふるえていた旅僧もびっくりして止めましたが、常世は、「お恥ずかしい次第です。せめてこれだけでも温まってお休みただこうと思います。」と言いました。旅僧はお礼の言葉とともに、「ぜひお名前を。」とたずねたところ、常世もかしくきれず、父のことから今までのことを話しました。そして、

「私も鎌倉武士の子です。鎌倉幕府に一大事が起こったときは、かけつけて、命がけてごほうしするかくごです。」と語りました。

次の日は雪もすっかりやんで、朝日が雪にかがやいています。旅僧は常世夫婦に厚く礼を述べて旅立ちました。常世は、旅僧の姿が見えなくなるまで見送りました。

その年の十月のこと、鎌倉に一大事が起きたとの話が伝わってきて、常世は勇ましく鎌倉にかけつけました。すると、常世は、<sup>③</sup>執権北条時頼公の前に呼び出されました。そして諸国の大名、武士の面前で、時頼公に、

「私は、いつぞや大雪の日、一夜の宿をそちの家でやつかいになった旅僧である。そちの温かい心づかいは今でも忘れぬ。このたびは、あの時の言葉通りよくかけつけてくれた。」との言葉をいただきました。さらには、鉢の木の代わりとして梅、松、桜の名が入った土地をいただき、大名にも取り立てられて、小田原城までもいただいたのです。

この話を聞いて、ぼくの心の中にぽっと灯がともった気がした。帰り道の自転車のペダルが、いつもより軽く感じた。

(注)

- ① 蔵を管理する人。
- ② 源頼朝のこと。鎌倉幕府を開いた将軍。
- ③ 執権という立場で幕府の政治の中心になった人。



## 5 はが路100km徒歩の旅

五年生の優花は、夏休みに仲良しのちひろと「はが路100km徒歩の旅」に参加することにした。芳賀郡内の一市四町にまたがる百kmの道のりを、小学校四年生から六年生の約百名が、八つの縦割り班に分かれ、四はく五日をかけて歩きます。

当日の朝、真岡市のスタート地点に集合すると、優花は、ちひろの姿を見つけました。だれとでもすぐ仲良くなれるちひろは、同じ班の子と楽しそうに話をしていました。

ちひろは優花の姿を見つけると、

「優花ちゃんとは別々の班だね。おたがい、がんばろうね。」

と言って、また同じ班の子の元へ行ってしまいました。

ひとりぼっちになった優花は、小さくため息をつきました。

①三度笠を頭にかぶり、いよいよスタートです。班のメンバーは、この旅で初めて出会った人たちばかりです。しかも、五年生は優花ただ一人。ちひろと同じ班になることを楽しみにしていた優花の心は、重くしずんでいきました。

初日は約十八kmを歩きました。八月の暑い日差しがキラキラと照りつ



け、体力をうばっていきました。宿はく場所の中学校に着くころは、足が痛くてへとへとでした。

二日目と三日目も毎日約二十kmずつ歩きました。真夏の暑さと、出会ったばかりの人たちとの慣れない班生活に、つかれがどんどんたまっていきました。

四日目になると、いよいよつかれもピークに達し、体が一層重く感じられました。

今日は一番の難所、「はが富士」の山登りです。朝から雨も降っています。ジャージの上にポロンチョを着たので、体中あせでびっしょりです。全員で気合いを入れるために、こう例の「チクサクコール」をさけびましたが、優花の声は消え入るようでした。足元の悪い山道は、草が生いしげり、優花たちは歩道に飛び出たささの葉をよけながら進んでいきました。注意を呼びかける声が、あちらこちらから聞こえてきます。雨とあせが目に入り、ふこうと思ったしゅん間、ぬかるんだ道に足をすべらせて、優花は転んでしまいました。

「痛いっ。」

転んだひょうしに、優花は足をひねってしまいました。

「だいじょうぶ？今日のゴールまであと少しだけど、歩けるかな？」

と言うリーダーの問いかけに、優花は、すぐには答えることができませんでした。その時、「優花ちゃん、けがしなかった？五年生が転んだって聞いたから、びっくりしたんだよ。」

という聞き慣れた声が聞こえました。後ろの班にいたちひろが、心配してかけつけたのです。

顔を上げると、同じ班の人たちも心配そうに見つめています。優花はリーダーに向かって、「大丈夫です。最後まで歩きます。」

と、力強く答えました。

救護きゆうごの人に手当をしてもらい、また、山道を歩き始めました。

優花のペースに合わせて、班のみんながゆっくり歩いてくれました。みんなもつかれているのに、何度も何度も声をかけ、はげましてくれました。休けい所にたどり着くと、

「がんばったね優花ちゃん、すごいよ。」

と、班のみんなが笑顔えがおで声をかけてくれました。心配そうな表情で、ちひろもやってきました。

「優花ちゃん、足の具合はだいじょうぶ？けがをしているのに、最後までがんばってすごいよ。徒歩の旅が始まってから元気がなかったから、心配していたんだよ。」

別々の班になってしまったちひろは、優花のことをずっと気にかけていたのです。優花は、ちひろの言葉に胸むねが熱くなりました。

夕食後の「旅立ちの会」では、各班が出し物を発表しました。みんなと言葉を交わし、生き生きと発表するちひろの姿を見ながら、この四日間をふり返りました。そして、優花は、残り一日、班のみんなと一緒にがんばろうと心に決めました。



最終日の五日目。ゴールの「ツインリンクもてぎ」をめざして出発です。みんなのかけ声も一段と明るく元気です。優花も浴道えんどうの声えんに、大きな声で元気よくあいさつを返しました。

ゴールはサーキットのレース場です。班の全員が横一列で手をつなぎ、かけ声をかけながら進んでいきました。ゴールに近付くと、にぎっている優花の手にも思わず力が入りました。

「せえの！」

優花の大きな声を合図に、みんながゴールに向かって大きくジャンプしました。

ゴール。百km完歩です。優花は、班のみんなとだけ合いました。ちひろも、すぐにやってきました。

「優花ちゃん、私は途中わたしとちゅうへとへにつかれて、『もう、やめたいな……。』と思ったんだ。でも、

優花ちゃんがかんばっている姿を見て、最後まで歩くことができたんだよ。」

ちひろの思いがけない言葉に、

「私も、自分一人の力だけでは、ゴールできなかつたよ。ちひろちゃん、ありがとう。」

優花の顔は、真夏の太陽のようにかがやいていました。

(注)

① 昔、旅人が多く用いた菅笠すげがさのひとつ。

② かけ声。元気を出すときや気持ちを高めるときなどに、大きな声でみんなでかけ合う、エール。

## 6 ポイ捨てされたゴミ

「おはよう。ごくろうさま。」

顔見知りのおじさんやおばさんに声をかけられ、陽菜はうれしくなった。

陽菜は奥日光に住んでいる。奥日光といえば、中禅寺湖に華厳の滝、男体山に戦場ヶ原など、その豊かな自然を楽しみに毎年たくさんの観光客が訪れる。六月の新緑が美しい季節に、学校の行事で地域の清掃活動をしていた陽菜たち五年生は、みやげ店や食堂が並ぶ道路沿いでゴミを拾っていた。ふだん歩いている道なのだが、よく見ると、あめのふくろやたばこの吸い殻などが落ちていた。陽菜と明美は、どっちが先に見つけるか楽しみながらゴミ拾いをしていた。この日も、多くの観光客が奥日光を訪れていた。

「きれいになるね。がんばってね。」

すれちがう観光客にも声をかけられ、陽菜はゴミ拾いに精を出していた。

ところが、中禅寺湖の遊覧船乗り場の近くで活動していたときのことだった。



「ねえ、陽菜。今の見た？」

明美が驚いたように言った。

「うん。信じられない。」

陽菜たちのすぐ近くで、おじさんが道ばたにたばこの吸いがらを投げ捨て、足で踏みつけたのだ。おじさんは、二人がゴミを拾っていることに気付いているはずだ。たまらずに、陽菜は強い口調で言った。

「道に捨てないでください。このふくろに入れてください。」

おじさんは、しぶしぶたばこの吸いがらを拾ってふくろに入れた。

その後、近くの広場でおやつとして持つてきたあめをなめながら、ひと休みした。緑色が濃さを増して堂々とそびえたつ男体山と、きらきらと水面がかがやく中禅寺湖は、絶景といえるほど美しく、陽菜たちは心が落ち着く感じがした。しかし、どうしてもさつきのおじさんのポイ捨てが二人の頭から離れなかった。

「私たちがいるのに、どうしてあんな事をするのだろう。」



明美が改めて口にした。

「本当に私も信じられないわ。だから、こんなにゴミがたくさん落ちているんだよ。」

「この前の総合的な学習そうごうてきの時間に、日光自然博物館の人が来て、日光の自然について教えてくれたじゃない。観光客の多い時期は特にゴミが増えるって言っていたよね。」

明美は、男体山をながめながらつぶやいた。

「うん。あの人の言うとおりだね。」

「そういうえば、湯元ゆもとビクターセンターの人も、人間の落とすゴミを食べて死んでしまう動物がいるって話してたね。」

思い出したように明美が付け加えた。

「そうだった。ゴミを捨てるって無責任なことだね。」

陽菜もそのことを思い返しながら言った。

陽菜の住んでいる日光市は日光国立公園に指定された場所もある。

また、世界文化遺産ぶんかに登録された建物もある。美しい自然や伝統でんとうある文化にふれることで心が豊かゆたになる場所を、みんなで大切にしていか



写真提供 栃木県日光市自然博物館

なくてはならない。

「さあ陽菜。そろそろ学校にもどろうか。」

二人はゴミぶくろを手にして立ち上がった。

「ちよつと待って。私、手を洗<sup>あら</sup>ってくるから。」

陽菜は広場を横切つて手洗い場に向かった。

やがてハンカチを取り出し、手をふきながら陽菜がもどってきた。

「陽菜、落としたよ。」

「えっ。」

「ポケットから何か落ちたみたいよ。ほら、あそこ。」

陽菜は後ろをふり返った。何も落ちていないはずの広場に、後で捨てようと思つてポケットに入れておいたはずのあめの包み紙が落ちていた。陽菜の目は、しばらくその包み紙をとらえたまま動かなかつた。

(注)

① 国(環境省)の施設。奥日光の自然を分かりやすくしようかいている。

## 7 もう一つのワールドカップを知って

翼は、小さいころからサッカーが大好きで、「将来の夢はJリーグの選手になって、ワールドカップに出場すること」というサッカー少年だ。

そして、翼と幼稚園も小学校もずっといっしょの幼なじみの武も、同じクラブチームに入って、一日も休まず練習に参加している。武はいつもにこにこしていて、試合で負けてもあまりくやしそうな顔をしない。レギュラーではないが、Jリーグの選手になることを夢見ている。

今日は、強ごうSチームとの練習試合。練習試合とはいえ、翼にとっては、市の選ばつメンバーに選ばれるかどうかの大切な試合である。前半は、おたがい得点のないままハーフタイムをむかえた。後半こそ得点するぞと気合いを入れ直している翼の耳に、

「武、行ってみるか。」

というかんとくの声が聞こえた。翼は耳を疑った。

「武を後半に出すなんて……。」

予想通り、後半は相手のペースに飲みこまれ、気が付くと四点も入れられていた。試合終



りようのホイッスルを、翼はぼんやりと聞いていた。

帰り道、武が翼に、

「試合、残念だったね。」

とほほえみながら話しかけてきた。しかし、翼はくちびるをかみしめて、武の言葉には一言も返さなかった。全速力で走って家に帰り、自分の部屋に入るとスポーツバッグをゆかにたたきつけた。

その練習試合後、何となくすつきりしない日が続いた。

そんな時、翼の家にサッカーチームの先ぱいである大木おおきさんから電話がかかってきた。大木さんは、矢板中央高校のサッカー部員で翼のあこがれの先ぱいだ。矢板中央高校はこれまで何度も全国高校サッカー選手権大会せんしゅけんに出場し、ベスト4進出を果たしたこともある学校だ。その先ぱいが、

「今度、練習試合があるから見に来いよ。」  
と言ってくれた。

「……ありがとうございます。見に行きます。」  
と答え、電話を切った。

土曜日、翼は鬼怒川運動公園に出かけて行った。

矢板中央高校の赤いユニフォームが、翼の目に飛びこんできた。でも、試合相手の青いユニフォームがどこのチームなのか分からない。そこへ、グラウンドにいた大木さんが軽く手を挙げてきた。えしゃくをした翼に、となりに立っていた女の人が、

「矢板中央高校の応えん？私は、息子の応えん。青いユニフォームのチームにいるのよ。」と話しかけてきた。

キックオフ。赤いユニフォームがいつせいにかけ出した。

「息子はね、今、十五才で知的障害者なのよ。生まれつき脳に障害があつて、うまく字を書いたり計算したりできないの。でも、サッカーが大好きで一生けん命練習して、知的障害者のサッカーの日本代表選手に選ばれたのよ。ブラジルでワールドカップが開かれているでしょ。知的障害者のワールドカップもブラジルで開かれるのよ。八月には息子もブラジルに行くの。あら、私ったら、自まんしているみたいね。」

その女の人は、ちよつとはずかしそうに翼にほほえんだ。「そう言えば、そんなチームがさくら市で強化合宿をしているって、新聞で読んだっけ。でも今日は矢板中央高校の圧勝にちがいない。」と翼は思っていた。



ところが、青いユニフォームの選手たちは予想以上にねばり強く、なかなか得点を許さない。それどころか、相手の動きをふうじ込めて、素早い縦パスでどんどんチャンスを作り、前へ前へと出てくる。そして、選手同士がたがいに声をかけ合い、試合を心から楽しんでいる。

今の翼の目に見えるもの。それは、ただサッカーが大好きで、世界のぶたいを夢見る、翼と同じ『サッカーを愛する仲間』だった。

試合終りよりのホイッスルが鳴った。

翼は立ち上がって、選手全員に精いっぱい、はく手をした。

帰り道、いつの間にか、翼は武のことを考えていた。いつも楽しそうにボールを追いかける武。小さいころ、いつだって翼と武は一つのボールを追いかけていた。それなのに、翼は武のことを……。

翼は思った。

「明日は、久しぶりに武とボールをけろう。」

## 8 お囃子はやし会での活動を通して

「テンテンドコドン。テンテンドコドン。」

聞こえてくるたいこのリズム。小学校五年生だった私わたしにとって、この音こそが、初めてのお囃子との出会いでした。

「お囃子、ためしにやってみない？」

近所のおじさんの一言がきっかけで、私は、お囃子を始めることにしました。

毎週二回行われるお囃子の練習に、私は欠かさず参加しました。すると、

「いつもがんばっているから、このおまんじゅうをあげるよ。」

おじさんたちは、優しくほほえみながら、私に話しかけてくれました。

おじさんたちは、いつでも熱心に教えてくれるので、楽器のうで前は、日に

日に上達していきました。たいこを上手じょうずにたたけるようになるのと、おじさんたちはたくさんほめてくれました。私は、お囃子がどんどん好きになっていきました。

このお囃子会では、二つのしめだいこしめだいこと和だいこわだいこ、かね、しの笛しのふエの、四種類の楽器を、五人



しの笛



和だいこ



かね しめだいこ

一組のチームとなって演奏えんそうします。

初心者は、一番やさしいしめだいいこから始めます。しめだいいこや和だいいこは手にマメができてやすく、小さな子どもたちは、マメをつくりながらも一生けん命に練習しています。たいこやかねは、たたき続けているとうでが痛いたくなります。しの笛も、息をふき続けなくてはなりません。お囃子は、音の強弱やリズム、速度などに気を付けながら、それぞれの分担ぶんたんを大切にしてくり返し何度も演奏します。五人の楽器の音色ねいろがきちんとそろうと、心地よい演奏になります。

中学生になった私は、四つの楽器の中で、最も難むずかしいとされるしの笛を任まかされました。これまでのしめだいいこや和だいいこ、かねとはちがって、しの笛は、美しい音色が出せるようになるまでにたくさんたくさんの練習が必要です。さらに、しの笛をふく人は、チームの中心となって、仲間の四人の演奏をリードしながら、みんなの音色と心をつつとまどめていかななくてはなりません。私は、頭では分かっている、最初のうちはなかなか演奏をまとめることができませんでした。中学生の私と、小学生四人を合わせた五人が、息を合わせて演奏できるように、何度も練習を行いました。

このときの私は、中学校の吹奏楽部にも入っていました。私の担当はフルートです。吹奏楽の演奏で、全員の息がぴったりと合い、美しいハーモニーをひびかせることができたときの喜びは、とても言葉では言い表せないほどです。吹奏楽コンクールなどの大きな大会が近付いてくると、全体練習やパート別での練習にも自然と熱が入りました。

ところが、コンクール前の大切な全体練習のときに、お囃子の練習が重なってしまったことがあります。「今は、もっとみんなと吹奏楽の練習をしなければ……。」こんな大切なときに、途中で抜けるのは、とてもつらいものがありました。

お囃子の練習に行かなければならないことをみんなに伝えると、部長から、

「あなたが部活動に一生けん命取り組んでいることは分かっているわよ。でも、お囃子の練習もあなたがいないと困るんですよ。また明日、しっかりと全体練習をしましょうね。」

と、優しく声をかけられました。部長は、私のお囃子会での立場を分かってくれていたのです。私は、後ろがみを引かれる①思いで学校を後にし、お囃子の練習に向かいました。

「お姉ちゃん、待ってたよー!」

練習場に着くと、メンバーの一人の小学生が私のところに向け寄ってきました。私に来るまでの間、四人は自分の分担の練習をがんばって行っていました。私は、胸が熱くなりました。

これまで積み重ねてきた練習の成果が認められ、二〇一二年（平成二十四年）の九月、東京の神社のお祭りに招待されました。九月とはいえ、この日は朝から気温がぐんぐんと上がり、むし暑い日になりました。何時間もしの笛をくり返し演奏し続けていると、この暑さのせいで息が続かなくなり、苦しくなってしまうことも何度かありました。

しかし、リーダーの私が、笛の音を途切らせるわけにはいきません。ふと何気なく周りを見渡すと、四人の小学生たちは顔を真っ赤にしながらしんに演奏しているではありませんか。「しつかりしなきや！」これまでの練習の日々を思い返しながら、私は、もう一度自分をふり立たせてしの笛を演奏し続けました。

無事に最後まで演奏をやり終えたとき、私の心に、さわやかな風がふきぬけていきました。

（注）

① 心残りでその場からはなれられないこと。

## 9 須賀神社の落ち葉はき

十一月。明日は、ボランティア活動の日。広ひろしが通う小山第二小学校の近くにある須賀神社の参道をきれいにそうじする日だ。須賀神社は、地域ちいきの人にとっても親しまれている神社で、毎年行われるお祭りには、多くの子どもたちが参加している。その参道は両側にちようの木が立ち並び、秋には葉が黄金色こがねいろにかがやき、とても美しい風景だ。その葉が落ちると、今度は一面が黄色いじゅうたんでしきつめられたようになり、それもまた美しい……と、そこまではよいのだが、その落ちた葉をはいて、長い参道をきれいにそうじするのは大変なことである。近所の人がそうじをしているものの、毎日毎日葉が落ちてくるので、とても間に合わない。そこで、広たちの学校では、毎年この時期に全校児童で須賀神社に出向き、参道をきれいにするボランティア活動を行っている。

「何だか、気が進まないなあ。何でぼくたちが……。」  
と広が言うと、

「そうだよな。それに、縦割り班たせわり はんでやるんだらう。明日は大変だなあ。」

と同じクラスの光一こういちが言った。



ボランテニア活動は、一年生から六年生までの縦割り班で行われる。六年生は必ずその班の班長か副班長になっており、それぞれの班でできそうな役割を分担してそうじをする。たいていは上学年の児童がほうきやくま手を使用し、落ち葉を集める。下学年の児童は集まった葉をビニールぶくろに入れて運ぶ、といった具合だ。広と光一も、もちろん班長になっていた。

ボランテニア活動当日の朝、広たち六年生の教室に校長先生がいらっしやって、「みなさん、どうして縦割り班で須賀神社の落ち葉はきを行うか、分かりますか。」と、話しかけられた。すると、クラスみんなは不思議そうな顔をした。校長先生は、おだやかな表情でその様子を見ていらっしやったが、その後、教室を後にされた。

いよいよ須賀神社に出かける時が来た。広や光一たち班長は、道具を運んだり、班のメンバーを集めて並ばせたりとスタート前から大いそがしであった。参道にとう着し、そうじを始めると、さつそく四年生が、くま手の使い方が分からない……と聞きに来た。一年生は、落ち葉を集めたふくろはどこへ持っていけばよいのか分からず、不安そうだ。下級生は、何かあるたびに班長をたよりにしてくる。ちよつとめんどうだと思ふ気持ちもあつたが、下級生が困つた顔で広のそばに来るので、広も一つ一つていねいに教えてあげたり、いっしょにそうじを進めたりしていた。昨年までとはちがつて今年は大いそがしのボランテニア活動だ。広も光一もひたいにあせをかき、夢中で落ち葉はきをした。

あつという間に時が過ぎた。アスファルトの路面が続いて見えるようになり、このふくろを運べば終りようというところまでこぎつけた。最後のふくろは落ち葉がたくさんつまっている。「ちよつと重いかな。」と思ったものの、「もう三年生なのだからこれくらいはだいじょうぶだろう。それに、ふくろを運ぶのは三年生の仕事だ。」と思い直し、三年生に収集場所まで持つていくように言った。三年生は喜んで引き受けると、ふくろを運び始めた。

ふと気が付くと、辺りがとてもきれいになっていた。そこで、ちよつとひと休みしようとしたその時、向こうの方で六年生の由香があわてて何かしているのが見えた。よく見ると、三年生が座りこんで泣いている。ふくろを運ぶ途中に走って転んでしまったらしく、落ち葉があちこちに散乱していた。由香は三年生にやさしく声をかけながら、必死で落ち葉を集めている。

「広さんの班でしょう。早く手伝って。」

そう由香に言われて、広ははつとした。「やっぱり、あの時……。」  
そう思いながらも三年生をなぐさめ、散らばった落ち葉をはき始めた。そんな広の姿を見て、

「手伝うよ。ぼくも同じ班だからね。」

と、下級生たちがかけ寄ってきた。そして、次々に落ち葉を集め始めた。

「ごめんね。ぼくが班長なのに……。」



広は言葉が続かなかった。班のみんなは、きつき広が教えたとおりに上手じょうずに道具を使って、落ち葉を片付けかたづけている。広もいっしょに必死で落ち葉をはき集めた。すると、今まで泣いていた三年生の顔がぱつと明るくなり、いつの間にかいっしょに落ち葉を集め始めた。そして、小さな声で「ありがとう。」とささやいた言葉が、広の耳に届とどいた。終りしまりよりうの時じ刻くになるころには、すっかり元気になり、また広の所ところにかけ寄よって、

「お兄ちゃんと同じ班ばんでよかった。また明日もいっしょにそうじしたいよ。」と笑顔で話しかけてきた。その言葉を聞き、なんだかちよつとうれしくなった。

学校までの帰り道、広は校長先生の言葉を思い出していた。学校にもどり、道具を片付ける間も、今日の出来事をふり返りながら、校長先生の言葉の意味を考えた。すると、不思議と、使った道具を最後まできちんと片付けようと、いつもより力が入っていくのを感じた。そこに光一もやってきた。そして、全ての片付けが終わると顔を見合わせ、広が言った。

「ぼく、校長先生の言葉の答えを見つけたような気がするんだ。」  
その言葉に、光一も大きくうなずいた。

「明日の昼休みに、一年生と遊ぶ約束をしたんだ。逆上がりを教えてあげたいと思って。」と広が言うと、光一も続いて、

「へえ。それいいね。そうだ。ぼくも明日、三年生をドッジボールにさそってみようかな。」  
そう言うと二人は、勢いよくかけ出していった。

# 10 わたしの生きがい

八十九才になる進さんの何よりの楽しみは、家の近くにある思川駅おもいがわえきのそうじと花だんの整備せいびでした。

午後四時ごろ、リヤカーを引いた進さんが現あらわれました。進さんは、たった一人でもう三十二年間も思川駅のそうじと花だんの整備を続けてきたのです。

「まるで、進さんの駅みたい。」

近所の人たちにそう言われると、進さんはとてもうれしそうにほほえみます。

私は、学校でボランティア委員会に入っているので、進おじいちゃんに会ってみたくなり、思川駅に行きました。おじいちゃんは、一生けん命草かりをしていました。



「線路わきの草がのびてしまうので、春から秋にかけて四回は草かりをしないとイケないんです。コスモスの種をまこうとしたのですが、草の力が強くて、一人でやっているのでは時期がおくれてしまったんです。コスモスはおくれてしまったけれど、今、苗床なえどこに葉ボタンをまき、十一月には、花だんに植えこみができるようにしたいと思っています。」

おじいちゃんは、話をした後、また草かりを始めました。だれかが捨てたジュースの空きかんが草かり機に当たって飛びはねています。おじいちゃんは、空きかん一つ一つをていねいに拾いながら、だまって草かりをしています。私は思わず聞いてみました。

「いつも、こんなに空きかんがあるんですか。やめたいと思ったことはありませんか。」  
 「すると、おじいちゃんは、にこにこして答えてくれました。」  
 「今まで一度もやめたいと思ったことなんてありません。」



私はびっくりしました。そして続けて話してくれました。

「いつかは空きかんやごみが一つもなくなる日がくると信じています。ごみを捨てないでというかんばんを立てたらどうかと言う人もいましたが、利用する人に心から分かっていたたくまで続けるつもりです。」

だれにたのまれたわけでもなく、たった一人で三十二年間も思川駅の整備を続けてきたおじいちゃん、今も休みなく駅をきれいにしているおじいちゃんも、急病で一週間入院したことがありました。でも、退院してすぐに駅に出かけて、花に水をやったそうです。私は、病気になっても思川駅を忘れないおじいちゃんの、思川駅に対する心が分かったような気がしました。

そして、

「思川駅は、私たちの生活にとってなくてはならないものなんです。それと、この仕事は私の生きがいなんです。」という、おじいちゃんの言葉の意味を、もう一度考えてみ



ようと思いました。また私たちの身近にこんなおじいちゃんがいることをもつとたくさんの人に知ってもらいたいと強く感じました。

最近では、進さんの手伝いをする人が出てきました。

いつも、みんなのことと思川駅のことを思う進さんの心は、いろいろな人に引き継がれているのです。



## 11 いつもふわふわ魔法のパンまほう

一九九五年（平成七年）一月十七日、阪神・淡路大震災が発生した。死者六千人以上。負傷者約四万人。電気・ガス・水道が寸断された。脱線した列車。たおれたビル。横たおしになった高速道路。火災のけむりが立ちこめる町なみ。行き場を失った人々。被災地の様子が連日報道された。



那須塩原市でパン屋を経営する秋元義彦さん。テレビに次々と映し出される被災地の映像を見て、いてもたってもいられなくなった。「何か自分にできることがあるのではないか。」自分の店のパンをトラックに二千個積み、夢中で走らせた。しかし、店の仕事も休むわけにはいかず、途中からボランティアの方にパンをたくした。道が寸断され、パンを積んだトラックは、思うように進めない。やつとのことで被災地に着き、ボランティアのメンバーが被災者にパンを配ると、食べた人たちの表情がみるみる明るくなった。それを伝え聞いた秋元さんの顔もほころんだ。しかし、食べられないパンもあった。運ぶのに時間がかかったため、いたんでし

まったのだ。地元にもどった秋元さんに、被災者である知人からこんな声が届いた。

「秋元さん、ふわふわのまま、長く保存できるパンを作ってくれよ。」

秋元さんは、さっそく開発に取りかかった。まず、パンの真空パックをためしてみた。しかし、パンがつぶれたまま元にもどらなかつた。冷凍にしてみたり、乾燥させてみたりしたが、結果はひどいものだった。思いつく限り様々な方法をためしたが、うまくいかない。もうだめかとあきらめかけていた時、先の知人から電話がかかってきた。

「研究は進んでる？保存がきくパン、できたかい？」

もう後もどりはできなかつた。実験をくり返していたある日、ふとしたきっかけでアイデアがうかんだ。「パンを缶詰にすればよいのでは……。」研究を重ねた結果、紙で包んだ材料を入れ、缶ごと低温で焼いてしまう方法でうまくいった。三年間保存可能なパンの缶詰の誕生である。開発を始めてから一年が経過し、ようやく商品化にこぎつけた。このパンの缶詰を待っている人たちのことを考えると、秋元さんの胸には熱い思いがこみ上げてくるのだった。

「パンの缶詰は、防災食、非常食として、きつと世の中の役に立つ。」と秋元さんは考えていた。まず、黒磯市（現在の那須塩原市）に、防災食として五百缶寄付した。また、新潟中越地震

では、被災地に無料で配った。パンの缶詰という今までにないアイデアで、日本をはじめ、中国、アメリカ、台湾の四か国で特許を取得。「関東通産局長賞」「中小企業庁長官賞」など数々の賞も受賞し、防災食、非常食として世の中に認められていった。さらに、パンの缶詰の安全性が評価され、NASAから宇宙食として採用された。二〇〇九年（平成二十一年）三月、宇宙飛行士、若田光一さんの乗ったスペースシャトルとともに、パンの缶詰は宇宙へ飛び立った。

秋元さんの活動は、さらに広がる。フィリピンで大規模な地すべりが発生したと知ると、一万四千缶を無料で現地に送った。他にも、ジャワ島地震、イラン大地震など、世界各国の被災地へパンの缶詰を送った。パンをほおぼる人々の笑顔を思いうかべると、秋元さんの表情も自然とゆるむのだった。

しかし、順調なことばかりではなかった。東日本大震災が発生すると、秋元さんはすぐにパンの缶詰を被災地へ送った。生産した缶詰を、次から次へと迷いなく送った。その数はこれまでと比かくにならない量だった。そして気が付くと、送料と材料費がかさみ、店の経営が危な



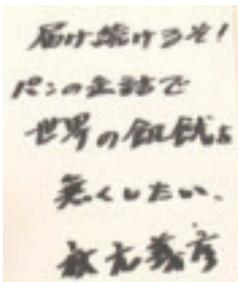
なくなっていた。無料で送っているの、利益が出ない。これでは店自体がつぶれてしまう。秋元さんは「支援を打ち切るべきか。」と考えていた。そんな時、店に多額のお金が送られてきた。うわさを聞きつけた人たちが、秋元さんのお店を助けるべく、お金を送ってきたのだ。ある人からはこんなメッセージが送られていた。「私は、今は被災地に行つて手助けすることはできません。せめてこのお金で一つでも多くパンの缶詰を届けてください。」秋元さんは、多くの人が自分の背中をおしてくれているのを感じ、支援を続ける決心をした。

秋元さんが、石巻市にパンの缶詰を直接届けに行った時のこと。「パン屋なので、こんなことしかできませんが……。」  
 と言つて、おばあちゃんにパンの缶詰をわたした。受け取ったおばあちゃんは、なみだを流しながら「おいしい」とパンを食べてくれた。それを見た秋元さんにも、ぐつとくるものがあった。

秋元さんがあるテレビ番組に出演した際、色紙にこんな言葉を書いた。  
 『届け続けるぞ！パンの缶詰で世界の飢餓を無くしたい 秋元義彦』  
 秋元さんの活動は今も続いている。

(注)

- ① 新しく発明や改良をした人だけに、作る権利を政府があたえること。また、その権利。
- ② アメリカ航空宇宙局。
- ③ 食べ物不足して、ひどくおなかがすくこと。



「秋祭りの会議が始まってしまおう。」

ついさつき仕事から帰って来たばかりなのに、夕ご飯をかきこむように食べ、あわてて出かけていく父。明は、そんな父の後ろ姿を不満に思いながら見送った。それにはこんな訳があったのだ。

明日の日曜日は、スポーツ少年団だんの野球の試合がある。補欠ほけつの明は、なかなか試合に出してもらえなかったのだが、明日は最初から出してもらえることになっていた。野球が好きな父はとても喜んでくれた。元々、明日は町内の人たちが集まり、もうすぐ行われる『鹿沼秋祭り』かぬまに出す彫刻屋台ちやくやくの準備じゆんびをする事になっていたのだが、それには参加せず、応えんに来てくれる約束をしていたのだ。明も、「よし、お父さんの前でヒットを打ってみせるぞ。」とはりきっていた。

ところが、今朝になって急に父が応えんに来られないと言い出した。

「一人は親せきのそう式ができて、もう一人はどうしても仕事の都合がつかなくなってしまうたそうなんだ。そうしたらお父さんが準備に参加しないわけにはいかないんだよ。」

「お父さんだってぼくの応えんがあるじゃないか。」

明はつい大きな声を出した。すると父は、

「明、うちの町内の彫刻屋台は江戸時代から町内の人たちの手で大切に受けつがれてきたものなんだ。ほかの町内の屋台だって同じだ。お父さんは鹿沼の彫刻屋台は、全国の人たち、いや外国の人たちにも自まんできる宝物たからものだと思っている。それをたくさんの人に見てもらえるのが秋祭りなんだ。お父さんをふくめて、祭りに関係するみんなが、今年の秋祭りも立派りっぱに成功するように協力してがんばっているんだ。だから明も、明日は応えんに行けないのをがまんしてほしいんだ。この次は絶対ぜったいに行くからな。」

と言った。でも明は、祭りに一生けん命になっている父にも、秋祭りに対しても、文句もんくを言いたい気持ちになった。

秋祭りの日が来た。鹿沼の市内は、大勢おおぜいの人でにぎわっている。

二日目の夕方、銀行の所の交差点で、明の町内の屋台をふくめた六台の屋台がぶつつけをや

るのを母と妹と見に行くことになった。でも、明の本当の目的は、大通りにたくさん並んでい  
る出店で買い物をする事だった。

明たちが交差点に着くと、もう六台の屋台が集まっていた。

まるで今にも動き出しそうなりゆうや鳥、数えきれないくらいの花や木などのすばらしい彫  
刻が、それぞれの屋台にきそい合うように取り付けられている。それらが、屋台の周りに下  
がっているちようちんに照らされて金色にかがやき、とてもきれいだ。なるほど、鹿沼の彫刻  
屋台が『動く芸術品』と言われているのが分かるような気がした。

明は、たくさんの見物の人たちの間から父の姿を探した。父は、二十人くらいの町内の人た  
ちといっしょに屋台の向きを変えるところだった。みんながいつせいに屋台に体重をかけると、  
二トン以上もある屋台がギギーツと音を立てて動いた。はっぴとはちまき姿の父。そのきりつ  
とした顔は、家にいる時とは全然ちがって見えた。大人の人たちに混じって何人かの同級生も  
いた。「へえ、みんなお祭りに参加しているんだ。」明は心の中でそうつぶやいた。

いよいよぶっつけが始まった。それぞれの屋台のおはやしを同時に演奏して、わぎをきそい  
合うのがぶっつけだ。

時には軽く、時には力強くひびく太鼓の音。笛をふく人のすばやい指の動き。正確なかねの

リズム。ほかのおはやしにつられないように気持ちを集中して演奏をしているのが分かる。

やがて、屋台の屋根に乗っている人たちが、手に持ったちょうちんを空につき上げ、「ウォー」と、かけ声をかけ始めると、下にいる人たちもそれに合わせて声を出す。町内の人々が一体になり、自分たちのおはやしを盛り上げるのだ。父も体中で声を出している。おはやしとかけ声の一つにとけ合い、まるで大きな音のうずの中にいるようだ。人々の熱気が伝わってきて、いつの間にか明の体にも力が入っていた。

「すばらしいお祭りだな。遠くから見に来たかいがあったね。」

ぶっつけが終わり、ほっときん張ちようが解とけた時、明の後ろにいた人の話し声があった。明はそれを聞くと、急に自分がほめられたようにうれしくなった。そして明は、「来年は、ぼくも祭りに参加しようかな。」と考え始めていた。



彫刻屋台

# とちぎの子どもたちへの教え 人として、してはならないこと、すべきこと



5つの教えで育もう！とちぎの子どもたちの豊かな心

「教え育てる道徳教育」指導資料  
ふるさと とちぎの心  
栃木県道徳教育郷土資料集（小学校高学年編）

平成27年3月発行  
〒320-8501 栃木県宇都宮市塙田1-1-20  
栃木県教育委員会事務局学校教育課

TEL 028-623-3392  
FAX 028-623-3399

この資料集は、学校で何年間も使うものです。次の年に使う人のことを考えて、大切にあげていきましょう。



いきいき栃木っ子3あい運動

学びあい、喜びあい、はげましあおう